



モユク・カムイ ^{NO.} 107

○モユク・カムイとはアイヌ語で「エゾタヌキ」のことです。 January 2021

ASAHIYAMAZON NEWS

あさひやまどうぶつえんニュース



もくじ

ぼくは動物大使 その68
森の小さな忍者 エゾモモンガ1.2

特集 動物たちの冬の過ごし方・戦略3.4

飼育研究レポート
～シンリンオオカミケンの最期～5

動物園のお医者さんのカルテ
～2020年の治療を振り返って～6

主なできごと
編集後記・飼育動物数7

エゾモモンガ

Pteromys volans orii

エゾモモンガ

学名 *Pteromys volans orii*
分類 げっ歯目 リス科

エゾモモンガは北海道全域（島嶼部と千島列島を除く）の平野部から亜高山帯の森林に生息する。ユーラシア北部に広く分布するタイリクモモンガの1亜種であり、本州、四国、九州に生息するニホンモモンガとは別種。

住処や食料、移動手段を樹木に依存するため、巣穴に適した樹洞がある樹木を含む森林に生息する。防風林や住宅地近くの雑木林などの環境にも生息していることがある。

本種は夜行性であり警戒心も強く、また一生のほとんどを樹上で過ごすため、日常で観察されるものではないが、現状では個体数も少なくなく、絶滅の心配はないとされる。

エゾモモンガの分布



濃い部分=生息範囲

ムササビ・フクロモモンガとの違いは？

ムササビはモモンガと同じリス科で、同じように飛膜を持ち、滑空する近縁な動物ですが、ムササビはモモンガより体がかなり大きく、モモンガをハンカチサイズとするならムササビは座布団サイズと言われます。また飛膜の付き方の違いや目の大きさの違いなどがわかりやすいです。

フクロモモンガはモモンガ・ムササビとは全く異なる祖先から進化した動物です。名前のとおりメスは袋（育児嚢）をもっており、カンガルーなどと同じ有袋類に分類されます。フクロモモンガと比べると人間の方がはるかにモモンガに近い親戚といえるでしょう。モモンガに似た能力や生態は、似た環境の中で進化すると姿や能力が似てくる収斂進化（しゅうれんしんか）の結果と考えられます。

ぼくは動物 森の小さな忍者

おおきさ
頭胴長 15~16cm
尾長 10~12cm
体重 100~120g

大きな目

頭の大きさに対してとても目が大きく、夜の暗闇でもよく見える。



▲種を食べるエゾモモンガ体に対して不釣り合いなくらい目が大きい。

くらし

主に日中は樹洞などの巣で休息し、夜間に外へでて樹上を移動しつつエサを食べる。主に単独で生活するが、一つの巣に複数の個体が同居することもよくある。特に冬期は一つの巣穴の中に数頭で身を寄せ合って保温効果を高め、互いに厳しい冬を乗り切っている。冬眠はしない。

飛膜を閉じると目の大きなリスのような外見



大使 その68 ～エゾモモンガ～

たべもの

植物の種子や実、若葉、花、冬期には冬芽など。旭山動物園ではヒマワリやカボチャの種、リンゴやサツマイモなど。

滑空

前肢と後肢の間、後肢と尾の付け根にかけて飛膜がある。また、前肢の手首のあたりから細長い軟骨が伸びており、これを外側に向けて張り出させることで前肢より外側まで飛膜を広げることができる。この飛膜を大きく広げて、木から木へ滑空して移動できる。時には50m以上も滑空する。コウモリのように羽ばたいて自由に飛ぶことはできないが、扁平な形をした尾を舵取りに使って旋回したり、多少上昇することも出来る。



飛膜を広げた様子

安泰ではない？エゾモモンガの今後

山深い森林だけでなく、身近な雑木林や防風林などにも生息し、個体数も少なくないとされますが、人間の住環境周辺の森林環境が減少するとエゾモモンガの生息場所の分断や孤立化がおきます。ほぼ一生を樹上で過ごし、地面に降りて移動することがほとんど無い彼らは、林が途切れるとそこから先に移動できず、残存林に取り残されることとなります。閉じられた環境では繁殖や個体の拡散が正常に行えなくなり、個体数が減少することにつながります。人間の活動により少しずつ圧迫を受けていて、彼らの将来は決して安泰ではありません。

えぞももんが舎 建設中!



ゆっくりロードのエゾタヌキの向かいにエゾモモンガの新施設が出来ます。完成をお楽しみに!

繁殖

1年に2回繁殖できる。最初の交尾は2月下旬～3月下旬。交尾後はメス単独で営巣し、出産は4月中旬～5月上旬頃。仔の数は2～6頭。生まれた仔は最初目も耳も開いておらず、毛も生えていない。生後約20日で耳が、約35日で目が開く。生後約40日で巣から出歩くようになり、約60日で母親から独立する。2回目の繁殖をする場合は仔が独立する6月中旬～7月上旬が交尾期になり、出産は7月下旬～8月中旬になる。

動物たちの冬の過ごし方・戦略

北海道は夏暑く、冬は寒さが厳しいという、四季がハッキリしている環境にあります。特にここ旭川は夏と冬の温度差が激しい土地柄として知られています。

そんな過酷な環境でも動物たちは逞しく自然の中を生き抜いているわけです。

この冬の厳しい寒さの中を動物たちはどうやって過ごしているのでしょうか？



旭山のキタキツネ

冬眠 寒い、眠くなってきた…大丈夫？

ペットとして飼育している動物にも冬眠する動物はいます。ハムスターなどがそうなのですが、飼っている環境が寒い場所だと全く動かなくなり触っても反応がなく、体は冷たくなっているため、飼い主は死んでしまったと勘違いすることもあるそうです。

野生動物で冬眠する動物といえばエゾシマリスやヒグマなどがいますが、実はこの2種の冬眠は異なるものなのです。

エゾシマリスの場合ハムスターと同様、極低温となり心拍数も極端に低下します。言ってみると仮死状態となるわけです。そうやって代謝を下げ、秋のうちに体に蓄えていた脂肪をゆっくりと消費して冬を越すのです。

そしてヒグマの場合はどうかというと、低体温、心拍数低下にはなるのですが前者ほど低下することはありません。仮死状態ではなく外部からの刺激でも覚醒するため仮眠状態といったところでしょうか。そのためヒグマの場合、冬眠といわず冬ごもりと表記されていることが多いです。ちなみに妊娠しているメスのヒグマはこの冬ごもり期間中に出産し、育児する期間となっています。

どちらの野生動物も秋のシーズンにしっかりと体に栄養を蓄えることが重要となります。



エゾシマリス



子運ぶエゾヒグマのメス

天然のコート

冬眠せずに野外で活動している動物もいます。エゾタヌキを例に挙げますと、基本的に冬でも野外で活動しています。北海道の厳冬期には-20℃を下回る日もあります。そんな寒さの場合はさすがに巣穴にこもっていることもありますが…。

秋のうちにしっかりと脂肪を蓄えており、冬毛に換毛しているため寒さに強いのです。この毛には秘密があり、アッパーコートとアンダーコートの二種類に分かれます。アッパーコートは硬い毛となっており、雨や汚れから体を守ります。それに対してアンダーコートはフワフワの柔らかい毛です。これは空気を多く含むため断熱性が高く、体の熱を逃がさない役目をしています。

夏毛と冬毛があり、夏毛に換毛すると毛量は減り、冬になる頃にはまた冬毛に換毛して毛量が多くなります。夏涼しく冬暖かいというわけです。体脂肪率も夏は少なく冬には多くなるため、見た目も夏はほっそりしているように見え、冬には丸々とした体つきになります。

冬は夏よりも活動は減り、じっとしていることが多く無駄なエネルギーを使わないようにしています。このようにして、冬、野外で活動している動物たちは厳しい寒さを乗り切っているのです。



夏毛でスッキリ



冬毛でモコモコ

かくれんぼ

エゾキウサギは夏毛と冬毛では全く違う毛色になります。夏は体毛が茶色となり、冬には体毛がほぼ真っ白になります。なぜここまでハッキリと色の違う換毛をするのか、その理由として外敵から身を守るという大事な役目があります。

外敵とは肉食動物である猛禽類やキツネなどの捕食者です。被捕食者は捕食者から身を守る術を持っています。エゾキウサギの場合、逃げ切ることが出来るほどの俊足、それに加えて、この毛の色も自身を守る術なのです。夏の茶色い色の毛は地面と同化し、冬には雪原などの白い色と同化するためカモフラージュとなり、捕食者の目を欺く事ができ、発見されづらくなるのです。



夏毛は茶色



冬毛は真っ白

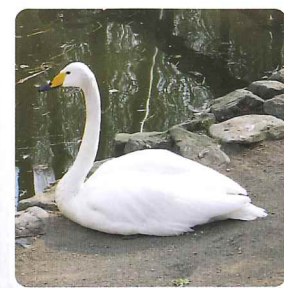
寒い・暖かいところへ行けばいい！

野鳥などは屋外でよく見かける身近な野生生物かと思えます。ただ、季節によって見られる種類が変わっていきたりすること、知っていましたか？(この鳥、冬になると見かけるなあ)と思っていた方もいるのではないのでしょうか？

実は鳥たちの中にも夏と冬で過ごしている場所が違う物がいます。よく知られているのはハクチョウなどの渡り鳥。渡り鳥は季節によって国を越える長距離を移動し、自分たちの過ごしやすい環境まで移動していく鳥の事をいいます。基本的に夏は涼しく冬には暖かい地方に移動します。渡りをする大きな理由として、餌の確保や繁殖に適した場所の選定が挙げられます。

ヒヨドリやウグイスなどの漂鳥と呼ばれるものもいます。渡り鳥と違うのは国境を越えず、国内の移動で済ませている鳥たちです。

夏は涼しい北海道で過ごし、冬には南下して本州などへ移動しています。中には夏は涼しい高山帯で過ごし、冬には厳しい寒さを避け平地まで降りてくるような短距離移動の漂鳥もいます。

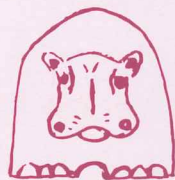


オオハクチョウ



飼育研究レポート

～シンリンオオカミ ケンの最期～



2020年10月10日にオオカミの森で飼育していたシンリンオオカミのケンが老衰により亡くなりました。

ケンは2007年5月にカナダの動物園で生まれ、その年の10月に旭山動物園にやってきました。

オオカミの森が2008年にオープンし、それから13年間パートナーのマースとともに自らの群れを築き上げ、アルファ(群れのリーダー)として見事に群れを率いてきました。家族の絆が強く、厳格な群れのルールの中で凛々しく生きるオオカミの素晴らしさは、ケンの姿を通してきっとたくさんの人に伝わったと思います。

ケンはこれまでにマースとともにたくさんの仔を育て、最近では娘2頭と息子1頭計4頭と生活を共にしていました。昨年からは歩様緩慢などの老化の兆しが見られ始めましたが、群れの仲間からの信頼は絶大でした。

今年の9月下旬から運動量が極端に減り始め、後肢のふらつきなども顕著になってきました。群れの4頭はケンの衰えに戸惑いながらもケンとの距離をとり離れて行動することが多くなりました。

10月に入り横臥からの起立に苦勞するようになり、八工がたかるようになってきました。放飼場内の小川に転落し、自力での起立ができずにレラ(娘)に助けられることもありました。

八工の卵が孵りウジが湧く懸念もあり麻酔をかけてバックヤードに移し、検査をおこないました。検査の結果、加齢による変形性脊椎症からの神経症状として後肢の歩様異常、失禁などが認められると診断し、投薬による症状の緩和を期待し、群れから分けた状態での治療を開始しました。

また、群れへの復帰も視野に入れ、4頭とは放飼場に隣接するサブ放飼場にて毎日金網越しに短時間の顔合わせを行いましたが、ケンに対して攻撃的な態度をとる個体はなく、ケンが居なくても4頭での生活も安定していました。

しかし、ケンの歩様は日に日に悪化し、自力での起立が困難になってきました。

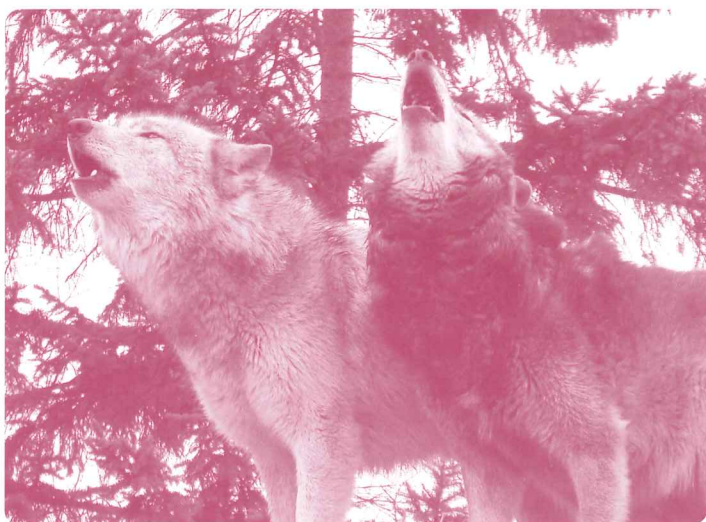
飼育スタッフによる起立介助を行い、ケアをしてきましたが、群れから分けて4日後の10月10日昼頃にそっと息を引き取りました。

亡くなる前日まで自力で歩き、金網越しではあったものの、最期まで群れの仲間とともに過ごせたことは、きっとケンにとっても幸せなことだったと思っています。

最期までオオカミらしく立派に生き抜いた父の姿を見届けたこともたちが、ケンに負けない素晴らしい群れを築いてくれることを願っています。



群れの仲間と(一番左がケン)



13年間響き続けたケンの遠吠え(右)

(オオカミの森前担当・佐橋)

動物園のお医者さんのカルテ



～2020年の治療を振り返って～



今回は個人的に2020年の動物治療で一番印象に残っているアムールヒョウの「アテネ」の腎臓病治療のお話になります。

アテネはアテネオリンピックのあった2004年生まれ(全飼育動物のなかでも一番生まれ年がわかりやすい)の高齢な個体です。2020年の2月に嘔吐が続いたことから麻酔をかけて検査を行い、慢性腎臓病と診断しました。

一般的に高齢ネコは慢性腎臓病になることが多いのですが、動物園のネコ科動物も同じことが起こり、過去にはユキヒョウの「ゴルビー」等も同様な症状から死亡しています。

腎臓は体の中の老廃物を排泄する役割があるので、その機能が落ちてしまった結果、排泄されない老廃物によって嘔吐や腸炎がおこり、最終的に死に至ります。

一方で慢性腎臓病は治療によって完治する病気ではありません。人間の場合は透析治療を行ったり、ネコでは皮下補液などを行いますが、アムールヒョウはどちらも難しいです。可能な治療は腎臓の組織の中で残った部分に頑張ってもらうための薬と消化管の中で悪いものを吸着する薬を投与することです。

そこで問題となるのが薬の量です。体重3kgほどのイエネコでは1錠でよい薬も、45kgのアムールヒョウでは15倍の量になってしまいます。結果、アテネの一日の投薬量はかなりのものになってしまいました。



◀1日の薬の量



馬肉の中に薬を
◀入れている様子

動物の中には餌に隠した薬に気づいてしまって投薬が難しい動物もいるのですが、幸いアテネは気にせず食べてくれました。飼育担当者も毎日大量の薬を用意するのは大変でしたが、アテネの健康のために頑張ってくれました。



「うまい!」「うまい!」と毎日薬を食べてくれるアテネ投薬の甲斐あってか、4月と6月に行った検査では腎臓機能の値は改善し、アテネの嘔吐もなくなって元気に過ごしてくれていました。

しかし、11月に行った検査では値が悪化し、嘔吐も数回見られるようになり徐々に悪化してきていることがわかっています。

最初から完治することはないと始めた治療でしたが、この半年間は毎日餌を完食し、屋外でのんびりしてきたアテネを見ていると治療の甲斐はあったのではと思います。

今後、さらなる治療というのは難しいですが、少しでも元気に暮らせるようにケアを続けていきたいと考えています。(獣医師 中村)

記事執筆中は小康状態でしたが、12月20日にアテネは死亡しました。死因は老衰(慢性腎不全)でした。

主なできごと

- 9月10日 ジェンツーペンギンNo.44死亡
(アスペルギルス症)
9月15日 札幌市円山動物園よりエゾユキウサギ
3頭来園
9月19日 おびひろ動物園とコラボライブ配信
エゾモモンガNo.17死亡
9月20日・21日 あにまるハッピーマーケット開催
9月26日 レッサーパンダの子ども2頭
屋外放飼場展示練習開始



- 10月1日 サル舎改築工事のため今年度の展示終了
10月10日 シンリンオオカミ「ケン」死亡
(多臓器不全による老衰)
10月13日 おびひろ動物園より
エゾタヌキ「うみ」が来園
クジャクとモルモットがおびひろ動物園へ
移動
10月18日 ととりの村・フラミンゴ舎の今年度の展示終了
10月25日 旭山動物園くらぶ主催環境保全フォーラム
in 旭山動物園「野生動物と人との共生に
ついて」開催

- 10月26日 盛岡市動物公園よりアライグマ1頭来園
10月30日 ヤギ「さくらこ」死亡(老衰)
11月1日 第52回旭川市旭山動物園児童動物画コン
クール表彰式開催



幼児の部
旭川市長賞(最高賞)
小島 智樹さんの作品



小学校低学年の部
旭川市長賞(最高賞)
青山 ひかるさんの作品



小学校高学年の部
旭川市長賞(最高賞)
佐藤 春真さんの作品

- 11月2日 ワオキツネザル「ルドルフ」死亡(心不全)
11月3日 旭川市民感謝デー・夏期開園最終日
11月4日 ヒツジ「しし丸」死亡(循環器不全)
11月4日～10日 冬期開園に向けた閉園期間
11月10日 アムールヒョウ「とわ(永遠)」栃木県の宇都
宮動物園へ移動

2020年を振り返る

2020年は、新型コロナウイルスに翻弄された年であり、色々なことを制限しながらの生活を余儀なくされました。未だ終息の兆しがなく2020年が終わりました。しかし、2020年の旭山は、たくさんの動物たちが繁殖・子育て、そして生き生きとした姿を今までと変わらず見せてくれた1年でもありました。2021年も動物たちの「いのち」の素晴らしさを伝えるため、がんばっていきますので、動物共々どうぞよろしくお願ひいたします。

編集後記

11月11日、冬期開園を無事に迎えることはできましたが、新型コロナウイルスの影響が再び大きくなり、もぐもぐタイムなどは、またしばらく実施できない状況となってしまいました。

今できることを模索しながら、様々な形で皆さんに動物のことを発信し続けていきます。

(佐賀)

最新情報はここでチェック!!



動物園公式
ホームページ



SNS



バックナンバー



モユク・カムイ No.107 2021年1月15日

- 発行所/旭川市旭山動物園
〒078-8205 旭川市東旭川町倉沼 ☎0166-36-1104
●発行人/坂東 元 ●表紙絵/中田 真一
●編集/中田 真一・高橋 伸広・大内 章広・中村 亮平・佐賀 真一
中野 奈央也
●印刷/株須田製版: 〒070-8045 旭川市忠和5条8丁目3-1 ☎0166-62-2266

飼育動物数

2020年12月1日現在

- 哺乳類 44種・307点
●鳥類 50種・367点
●は虫類 7種・20点
●合計 101種・694点